

【小説部門・最優秀賞】

舌縁

私立広島なぎさ高等学校 第2学年 井上 梨帆

六月の中旬、片田舎に住むいたって普通の高校生である僕は新聞の片隅にこんな記事を見つける。

高校生自宅で死、舌を噛んだか

19日未明、男子高校生Y君（17）が鉄炮町にある自宅で亡くなっているのが発見された。死体は舌が三分の一ほど欠損しており、死因は窒息だと思われる。

この時代に舌を噛んで死ぬとかあるのか。僕は少し驚いて、だけどぼくとY君は全くの他人であるし、今日は高校二年生になってから二回目の定期テストの最終日なのでいちいち気にしている時間はない。ご愁傷様です、と心の中で呟いて、いつもより少し急ぎ目に朝の支度を進めていく。登校中、数学のノートを忘れたことに気づいたけど無視してイヤホンに耳をつっこんだ。途中で合流した夏木が勝手に喋り始めた。今日提出の課題リストの中にちゃっかり数学のノートもラインナップされていて、げんなりしながら学校につき、順調にテストをこなしていく。今日最後のテストの数学Ⅱを解き始めて三〇分くらいたった頃、突然今朝のY君のことが頭に浮かんできて僕の意思とは全く関係のないところで涙が流れてくる。次第に横隔膜が僕の気持ちにボイコットして暴走し始めて、ウ、とかグギ、とか言いながら必死で戦っていると試験監督の先生が「大丈夫か。」と声をかけてくる。進撃の巨人のリヴァイ兵長に似た物理の先生は僕の背中をさすりながら「ゆっくり息をして大丈夫。退室したらテストの続きは解けなくなるが、わかっているか。」と聞いてきてくれて、声までそっくりだもんなぁと変なところで感心してしまう。だけどその間にも全然息が吐けなくて過呼吸みたいになってくる。あまりに大丈夫そうじゃない僕を一瞥した兵長は、ン、と短くうなずいてハンカチを僕に渡すと、かかとをコツコツ鳴らしながら前の教卓に戻っていった。僕はやつのことで階段まで行って、体操座りで両膝に額をくっつけて呼吸が落ち着くのを待つ。神様仏様クニノミヤツコ様…とご利益のありそうな人たちに祈ってみる。こういうときだけは信心深い男なのだ。僕は。それにしても苦しくて仕方ない。アもうダメ、死ぬ、と思ったとき、急にY君のことが頭の中にポーンと浮かび上がる。もしかしてY君もこんな気持ちだったのだろうか。死に通ずる苦しさを身近に感じて、少しショックを受けているとようやく横隔膜が鎮まってくる。代わりに今まで止まっていた涙が鼻水と一緒に流れてきたけど、兵長のハンカチのおかげで事なきを得た。

その事件以来、僕の頭の中はかなりの頻度でY君のことでいっぱいになって、悲しいんだか何だかわからないけど涙が出てきて一〇分は止まらなくなる。登校中、耳元で歌っている毛皮のマリーズがずっと同じ曲を演奏しているのにも気づけないし、読破しようともくろんでいる太宰治全集第二巻の内容も一行読んではその前の前の行から読み返すの繰り返しで全く頭に入ってこない。日本史の先生の生徒をほとんど例外なく眠りへいざなうウィスパークボイスもものともせず、僕は思考の海へ帆を上げる。Y君くんはいったいどんな子だったんだろう。身長は？僕と同じくらいかな。どんな声でしゃべったんだろう、話すスピードは？どんな音楽を聴いていたのかな。部活は何だったんだろう。文系？理系？もし友達だったら勉強教えあったりしてたかな。でも英語とか何かから教えてもらったらいいかわかんないくらいわかんないな。僕は僕がなぜこんなにY君のことが気になるのかが不思議で、だけど気になるものは仕方がないし、なんだかそわそわしてしまう。気づいたらチャイムが鳴って、授業を聞いてなかったことにちょっと罪悪感を覚えながら真っ白なノートを片付ける。もうすぐ夏休みだ。夏木が軽く伸びをしながらやってきて、ぐあーぐぬぬぬ、とうめき声をあげている。それを見ているとなんだか夏木には僕のこの気持ちを話してもいいような気がして、夏木とは中学の頃から一緒に、だからじゃないけど僕は安心して胸の内を打ち明けられる。それに何よりも僕以外の誰かにもY君という男の子の存在を知ってほしくて、僕が知っていることとY君について思っていること、とりあえず全部話してみる。話し終えた頃には夏木が引きつった顔をして僕を見ていて、だけど別に夏木が引いていようといまいと何の問題もないし、後悔なんて一mmもなくて、むしろずっと一人で抱えていたもやもやを言葉にして吐き出したことが僕を大分すっきりさせる。チラと見やると夏木はもう普段と変わらない調子で弁当を広げ始めていて、夏木のこういう変に肝の据わったというか、さっぱりしたところが思いのほか好きだと改めて思った。

それから僕の金曜日は学校が終わった後バトミントン部に行く夏木を見送ってから図書室に行き、十五分くらいあてもなく日本文学の棚を巡回してから、結局いつまでも読み終わらない太宰治全集と夢野久作の短編集を交互に借りて、たまに図書館の司書さんから借りっぱなしの金色夜叉を返せとせつつかれ、いつもと同じ道のをたらたら歩いて下校して、それから三〇分市電に乗ってY君の住んでいた鉄炮町まで行き、ちょっと街を歩いた後、適当なカフェに入ってコーヒーを頼んで八割くらいはY君のことを考えて、残りの二割は本を読んで過ごすのが当たり前になった。僕のこの習慣はすぐ聡い母親に感知され、彼女でもできたのかとちょっぴりお祝いムードになる。僕は否定も肯定もせず日々を生き、やっぱり金曜日になると自然と鉄炮町に行かなくてはいけないような気がして、それは一種の見逃がせないジンクスみたいな、けどどなんだか心地のいい束縛みたいな感じで僕の足を動かした。夏井は僕のこのささやかで慎ましい習慣を「まるで百夜通いだね。」とつきさっき古典の授業で知った言葉でなんとも情緒的な表現をして、僕はまんざらでもなく机に突っ伏す。当の夏木は僕の頭を適当にかき混ぜながら、「え～、なんでちょっと喜んでんの。」と呆れた顔して言って、僕の机に筆箱と教科書の一切を忘れて自分の席へ戻っていつ

た。

夏休みになると僕の鉄炮町通いは週四日に増え、夜は毎日三時くらいまで起きて心中とか、とにかく人が自ら死を選ぶような結末の話を読みふけた。それと並行して去年の夏に買ったパソコンでY君の死に関係のありそうなものをかたっぱしから調べて、夏休みの課題もせず、朝な夕な考えることはやっぱりY君のことで、とうとう僕はY君の死は緻密に作りこまれた自死なんじゃないかという仮説を思いつき、Y君の死をより幽玄な、美しいものとして考えるようになる。ごはんもだんだんのどを通らなくなってきた、ついには夜ご飯のデザートとして出されたリンゴを盛大にもどしてしまう。そのまま意識が遠のいて病院に運び込まれるも、原因は疲労と寝不足によるもので、ついでに軽いリンゴアレルギーと診断される。病室で噂に違はなく白い天井を見上げながら考えるのはやっぱりY君のことで、Y君のことを考えているとのどが渴いて、心臓がめちゃくちゃに脈打って体じゅうかきむしってしまいたいような、頭の中がぐちゃぐちゃになってきて訳も分からず泣きそうになってしまう。夜も明けて無事退院した僕はよりいっそうY君のことが気になってきてしまって、夏木たちと遊んでいてもトイレをしていてもご飯を食べていても、何の前触れもなく涙が流れ始めてみんなも僕もびっくりしてしまう。けどどうすることもできないし、「なんだよ。泣き虫ちゃんか。」という夏木の一言で僕のあだ名が泣き虫ちゃんになったりした。家の中でも口を開けばY君の事しか話さないから家族にも気味悪がられてお父さんは僕を腫れもの扱いしてくるし、お母さんはシンプルに頭の心配をしてきた。たいていの人にとって僕がこんなにも心砕くY君の死は所詮新聞の片隅に載っていた情報のひとつに過ぎなくて、そんな文字の羅列なんてまったく取るに足りない微細なことで、僕がいくらY君の死を悼み、涙を流したとしても、みんなからしたら友人の一人が知りもしない男子高校生の死に固執しているこの状況は、至極どうでもいいことなのだ。けど僕にとってY君の死は看過できない事実であり、もし僕とY君がどこかですれ違っていたり、電車で隣の席に座ったりしていたとして、万が一そうでなかったとしても、Y君のことを考えるこの時間は多大な意味を持っていて、高校二年生の、まさに箸が転がっても笑えるような日々を捧ぐにふさわしいものなのだ。

夏休みも終盤になると僕の鉄炮町での過ごし方はカフェにも入らず銀色の変なオブジェが置いてある小さな公園のベンチに二時間も三時間も座って、じっと日が傾くの眺めるというものになり、ある日僕はスーパーの裏のコンテナに売れ残った盆灯籠が粗雑につつまれているのを見つける。まだ新品の盆灯籠が、悠々と風に紙飾りを泳がしているのを眺めていると、なんだかそれが世界一清らかで、美しいものに思えてきて、いてもたってもいられなくなる。花屋の店先に白いカサブランカが並んでいるのを見つけて、どうしても買わなくてはならないような気がしてくる。いくら歩いても鉄炮町に僕の居場所はなく、結局最後はあの公園にたどり着いて、銀色のオブジェの前に途方に暮れて立ち尽くしてしまう。まるででっかい墓標だ。願わくは僕も、この大きくてまあい墓標の下で誰に知られることもなく眠らせてください…心の中で祈って、無機質に光る銀色のオブジェの

たもとにカサブランカをそうっと置いて、内側からやわらかく発光しているような、しとしとした花卉をじっとみる。中に銀河でも隠しもっているのだろうか。出し惜しみせずにもっと見せてくれたらいいのに。植物は神様が新しい世界を作る際、僕らの世界へ間違えて取り落としてしまったものなんじゃないのだろうか。僕ら人間には到底追いつけない美しさだ。Y君もそんな存在になってしまったのだろうか。悠久を渡る美貌と刹那的な美しさを併せ持つ、したたかであえかな存在に。カサブランカは相変わらずなんにも語らず、やっぱり静かな銀河のふちから、こちらをそっと見つめている。その銀河の果てに、僕の知りたくて仕方がない秘密がすんなりいたりするのだろうか。かさかさしたコンクリートの上に横たわったカサブランカは驚くほど鮮やかで、僕はもう涙の勝手にさせて、筆箱からボールペンを取り出すと、へにゃへにゃした頼りない字で盆灯籠に名前を書く。僕の名前だ。日はすっかり傾いて、公園には誰もいない。海の底みたいな静けさが辺りを包んで、カサブランカの花香がやわらかく降る雨みたいに僕の時間をせき止める。まるでこの世から切り取られたみたいな空間で、僕は神様に直訴する。お願いします、お願いします…Y君を生き返らせてください…それが無理ならどうか僕を太陽の秘密の恋人…ネメシスのとこまで連れて行って……気づくと僕は盆灯籠の隣で胎児みたいな恰好で眠っていて、少なくともさっき花屋を出てから五時間は経っている。ケータイにお母さんから連絡がないことを心配するメールが電話と合わせて二〇件は届いていて、尚もボーっとしていると突然肩をつかまれる。うつろに後ろを振り返ると少し息の上がった夏木がいて、おばさんに心配かけんなよ、とちょっと怒った顔で、今にも泣き出しそうな声で言う。帰り道、僕らはなんにもしゃべらずに、夏木はやっぱり怒った顔で、黙って僕のカバンを持ってくれた。そんな夏木を見ながらも考えるのはやっぱりY君のことで、もう自分がY君の何について考えているのかもわからない。ただただY君のことをぼんやり思っているのだ。最寄りの駅に着くと駅のロータリーに車を止めたお母さんがすべての感情をそぎ落としたみたいな顔で待っていて、夏木に「迷惑かけてごめんね。ほんとに。」と疲れた声であやまる。夏木はそれを丁重にいなして、僕に「しっかり寝ろ。」と言って自分の家に帰って行った。車に乗ると、お母さんが僕の行動がいかに異常か分かっているか、どれだけ周りに迷惑をかけていて、生活にも支障をきたしている自覚はあるかと静かに切り出す。僕はなんでそんなことを言われたいといけないのか分からなくて、尚もY君を擁護するようなことを言う。すると急に感情を露わにしたお母さんが大泣きしながら僕の太ももを何度も叩いてきて、無抵抗の僕の手首を強く握ると「お願いだから、もう二度と鉄炮町には行かないで…。」と絞り出すような声で言う。いつもより何歳か年を取ったような顔で、見たこともないような質量の怒気をはらんだ目を僕に向ける。鈍い光を一心に集めた瞳がざらざら光っていて、気圧された僕はやっと事の重大さみたいなものに気づいてなんにも言葉が出なくなる。お母さんは強く息を吸い、静かにハンドルを握って、さっき取り乱した分の平静を取り戻すように、丁寧に、丁寧に車を走らせた。

それから一か月くらいたって、僕の生活も少しは改善された。一度だけ鉄炮町の、あの

公園には行ったけれど、もうY君のために供えた盆灯籠とカサブランカはどこかに行っていて、クリスマスの夜にサンタさんが紅茶を飲んでクッキーを食べて行ってくれるみたいにY君が持って行ってくれたんだろうか…と思うと突然涙が出る現象もピタリと収まった。家族との関係もいい感じで、ここ最近僕と僕の周りにいる人々の平穏は守られている。

キモチのいい風が吹き込む土曜日の午後、リビングのソファで昼寝をしていたら夢を見た。見覚えのない男の子が鉄炮町の公園の、あの銀色の変なオブジェの前にブルースリーみたいな黄色いジャージを着て立っている夢だ。男の子は裸足でチャコのサンダルを履いていて、ポケットに両手を突っ込んで立っている。僕たちは同様に、瞬きのひとつすら見逃さないくらいの慎重さで互いの姿を見つめあっていて、その後ろですごい勢いで日が沈み、夜になってまた朝日が昇った。早送りの映像みたいに雑草が伸びてくる。日差しがだんだん夏のそれになってきて、鮮明に木の影を映した彼がうっそり笑う。いつのまにか僕たちの足元には精巧なロボットみたいな蟬の死体がたくさん転がっていて、彼の足元にはしなびた花と真っ白い盆灯籠が大量に積み上げられている。彼はしばらくそれらを眺めてから、その中の一つを選んで、深い海の底から恋人の骸でも引き上げるみたいにゆっくり抱き起こす。彼は緩慢な動作で僕のほうを見据えて、見せつけるみたいに唇を開く。まばたきでさえ、ひどくゆったりとしたその男の子は目の前にいるのにどこか遠くて、僕に会ったこともないY君の姿をほうふつとさせる。薄く開いた唇の間から赤黒い塊がズロッと転がり落ちてきて、真っ赤に染まったキレイな歯並びがのぞく。その後を追いかけるみたいにして、彼の柔らかな、絹糸みたいな声が夜の静寂を縫い合わせるみたいに慎重に、厳かに紡ぎだされる。

「トウジ君、僕はね、幸せだったよ。」

そこで僕は崖から転がり落ちるみたいにして現実に戻されて、誰もいない家の独特の静まり返った雰囲気と、窓からサラサラ吹き込む風が演出する正統派すぎる土曜日の昼過ぎの中に放り出される。さっきまでの夢に引きずられて、まだひとり、違う世界にいたい。ぐしゃぐしゃ後ろ髪をかき混ぜながら、遠くに聞こえる潮騒みたいに鳴っているテレビを消して、カーテンの隙間から無事逃げ出した光の中で、キラキラ光るほこりをぼんやり見ているとさっきまで見ていた夢がじんわり浮かんでくる。あの背が高く、痩せていて、右目だけ二重で、髪が短くて、金と黒がしゃぎしゃぎ混じった髪型の、ちょっとだけ若いころの忌野清志郎に似たカッコイイ男の子の事がまだかろうじて瞼の裏というか記憶の中に残っていて、もしかしたらさっきテレビでやっていたRCサクセッションの特集が作り出した幻影かもしれないけど、だけど、ああ、きっと彼こそ僕が思い焦がれていたあのY君で、「やっとなあえたあ…」と噛みしめるようにつぶやくと、なんだか心がポカポカしてきて、頬が勝手に緩んでしまう。顔も名前も知らない十七歳の子の男の子が、いつの間にか僕の中で無視できないほど大きな存在になっていたことはもう紛れもない事実で、

彼のことを思って泣いてしまうこの現象はたぶん恋だったんじゃないかと今更気づく。自分でも気づかない間に、僕は今までにないくらい誰かを好きになっていたんだ、妙に感慨深くて、僕たちはもしかしたら、恋人とまではいかななくても、一等仲のいい友人とかにはなれていたのかもしれない。放課後にはファミレスに寄り道して、その日の夜には全部忘れてしまうくらいくだらないことを何時間も話すような間柄に。街を歩く二人組は、みんないつかの僕とY君なのだ。やっぱり悔しい。なんで舌なんて嚙んじゃったんだよ。ばか。だんだん意識がはっきりしてきて、目のふちにとどまり切れなくなった涙がこぼれ始める。僕は三週間ぶりくらいにもうこの世のどこにもいないY君のことを思って泣いて、けど今回の涙はたった十七歳で死んでしまったY君のためだけじゃなくて、ついに今生では巡り合えなかった僕たち二人の不幸のためのもので、リビングにおいてある空気清浄機がごうん、と音を立てて部屋の湿度が1%上がる。いつの間にか赤い給水ランプがついていて、俺はタンクに水を入れながら背筋をしゃんと伸ばす。タンクの蓋を渾身の力で締めて、おし、と気合を入れる。ことことこと…と空気清浄機が水を飲みこんで、給水ランプが青に変わるのを見届けてから、なんにもない空中を見つめる。今から念じることは僕からY君へ対する餞別というか、誓いというか、とにかく僕が死んだ後も僕を導く指針みたいなもので、Y君よ、そこにいるのならどうか聞いてはくれないか。僕はやっと分かったよ。僕がいくらキミのことを悼んで、キミのために祈ったところでキミのためにはならないし、世界に七〇億ちょっといる人類の一人である僕の祈りに過去を変えるような力は到底なくて、もし僕が今スグ舌を嚙み切ったとして、キミと出会える確証もない。そもそも僕は老衰以外で死ぬ予定はないし、だからキミには一刻も早く転生してもらって、虫でも何でもいいからとにかくはやく僕に会いにきてほしい。どちらかが少しでも立ち止まったら僕らはもう永遠にすれ違ったままだ。そんな、まるで太陽とネメシスみたいなお互いの身を滅ぼすような関係で僕らは結ばれていて、もし次にまた、人の姿で出会えたならば、せめてもの祝福に地球に大絶滅をもたらす隕石の雨を降らせよう。オールトの雲より先に、ひとりたゆたうキミへ、精いっぱいの言祝ぎを。僕は前に進む。ちゃんにご飯を食べて、日付が変わる前には寝て、お母さんたちを安心させて、質実に、健やかに日々を送る。いつかキミに出会える時を心待ちに、明日も生きる。生き続ける。僕の愛しいネメシスよ。次の逢瀬まであと二六〇〇万年、それまでどうかおげんきで。